

# 「臨床心理学」教育における「21世紀を生き抜くための能力」の「実践力」の捉え方

加藤 哲文\*・五十嵐 透子\*・近藤 孝司\*・田中 圭介\*・  
宮崎 球一\*・宮下 敏恵\*

(平成29年2月27日受付；平成29年4月11日受理)

## 要 旨

本稿の目的は、「21世紀を生き抜くための能力」の「実践力」を構成する3つの能力である「自律的活動力」、「人間関係形成力」、「社会参画力」の養成のために、「臨床心理学」教育においてどのように捉え教育するか、また教育目標の評価基準の設定を行うことであった。

まず「臨床心理学」教育における「21世紀を生き抜くための能力」の「基礎力」、「思考力」、「実践力」の捉え方と教育方法について説明し、それらの教育実践が「実践力」の養成の基礎になることを論じた。次に、『報告書5』の付表1「各学校段階で養成することが期待される実践力と共有価値」を参考に、「臨床心理学」教育における「実践力」の評価基準を設定した。そして本学の臨床心理学コースの必修講義である「カウンセリング基礎演習」、「臨床心理学」、「教職実践演習」、「実践セミナー」において、「臨床心理学」教育における「実践力」の評価基準と対応する、各講義における評価基準を設定した。

## KEY WORDS

21世紀を生き抜くための能力、実践力、臨床心理学、教員養成

## 1 はじめに

現代の日本の社会は「知識基盤社会」、「情報化社会」、「多文化共生社会」が本格化・高度化しつつあり、これまでとは異なる資質・能力が必要とされる世の中になってきている。世界の動向を見ても、21世紀の新しい世界で持続可能な社会を形成していくためには、それに対応した教育改革が必要であることが、各国で一貫した見解である。

「知識基盤社会」とは、「新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会」と定義され、2005年の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」の中で示されたものである。グローバル化の進展により、これまでの学校や教科書で学んだ既存の知識だけでは解決できない問題が多くなってきており、既存の知識を用いて調べ、一人ひとりが知識を持ち寄って共有し、新しい知識を創生していくことが問題解決の糸口となる。さらにはインターネットの普及と高速化、世界規模でインターネットユーザーが拡大する「情報化社会」になることで、知識を調べ共有しやすい環境が整ってきている。そして国境を越えて、様々な文化、宗教、風土、民族が身近な存在となり、21世紀の人間は社会の多様性の中で生きていくことが求められる。

このような先行きの見えない複雑化・高速化・国際化する社会では、変化それ自体を適切な方向へと向かわせる資質が必要となってきており、これが日本の今後の教育課題となっている。これを踏まえ国立教育政策研究所は、「21世紀を生き抜くための能力」として学校教育のなかで養成すべき資質と能力を「基礎力」、「思考力」、「実践力」の3要素から明確に定義した。これまでとは異なる新しい教育への転換が志向される中で「21世紀を生き抜くための能力」は、変化の激しい今日の社会で「生きる力」を養成する、今後の教育課程の方向性を示唆するものとなっている。

臨床心理学は、精神医学や哲学などの影響を強く受けながら、これまで「こころ」の発達や成長、適応、学習に関する膨大な知識と理論を形成してきた。そして、「主として心理・行動面の障害の治療・援助、およびこれらの障害の予防、さらには人々の心理・行動面のより健全な向上を図ることを目指す心理学の一専門分野<sup>1)</sup>」と定義されるように、人間の精神的・身体的・社会的な健康の維持促進と不適応からの回復と不適応の予防を目指す学問である。臨床心理学を教育現場に活用することで、学級運営や生徒指導、教育相談、児童生徒・保護者との関わりの中で、児童

\*臨床・健康教育学系

生徒が精神的にも身体的にも健康な状態を維持し、不適応状態からの回復および不適応の予防へとつなげることができ、また教員が臨床心理学の知識と理論に基づいて児童生徒と関わることで、他者を尊重する態度やあり方の養成、共感性・道徳観の発達、コミュニケーション・スキルの成長、自己洞察の促進などが見込まれる。これは児童生徒の「21世紀を生き抜くための能力」の「実践力」の養成に大きく資するものである。

## 2 「21世紀を生き抜くための能力」について

今日、世界における教育改革の趨勢は、知識を創造的に応用する力の養成に向かっている。その力をOECDのDeSeCoプロジェクト（1997年～2003年）では、「単なる知識や技能の習得を超え、共に生きるための学力を身に付けて、人生の成功と、良好な社会を形成するための鍵となる能力概念」として定義し、本邦では国立教育政策研究所が、「21世紀を生き抜くための能力」として整理している（表1、図1）。この「21世紀を生き抜くための能力」は、「基礎力」、「思考力」、「実践力」の三層で構成される。

以下、「臨床心理学」教育において、これら3つの能力をどのように捉えれば、児童生徒の「21世紀を生き抜くための能力」の養成を促進させる教員を養成できるのかについて述べる。

### 2.1 「道具や身体を使う（基礎力）」の捉え方

「基礎力」は、言語、数量、情報（デジタル、絵、形、音等）を扱うスキルで構成され、道具としてのリテラシーを意味する。人間は、生活世界で生じる事象を把握したり、自分の思いや考えを効果的に表現したりできるようになるために、言語、数量、情報、身体を使って、周囲の世界を認識し、表現することができる。この能力によって人間は創造的な活動を行うことができ、今日の豊かな社会の形成につながっている。「基礎力」の養成は、普段の日常生活から社会の変革まで必要となる基礎的な能力である。

「臨床心理学」教育の立場から、言語、数量、情報を扱う「基礎力」をどのように養成するかを述べる。「基礎力」としての言語を扱う力は、①研究論文やテキスト、講義等の学びから、様々な現象に関する原因やプロセスを理解し、説明できること、②アセスメントや理論を一人ひとりの児童生徒に適用し、臨床心理学的見立てを立てることができること、③自分の考えをより客観的なエビデンスを用いて言語化し、他者と意見交換ができることである。実際講義では、グループディスカッション、観察学習、論文の輪読などを積極的に取り入れることで、言語スキルの養成が行われる。

数量や情報のスキルは、主に「臨床心理学セミナーⅠ・Ⅱ」で養われる。心の働きに関する一般法則や原理を理解するためには、先行研究で示された実験や調査のデータを理解し、自ら収集したデータを表やグラフにまとめ、統計的手法を用いて分析や解釈を行うことが求められる。また、先行研究のエビデンスを整理し、研究の仮説を立て検証する過程では、様々なリソースにアクセスし、情報の収集と整理を行う力が求められる。そしてそれらを統合し、言語スキルを用いて卒業論文を作成することに至る。

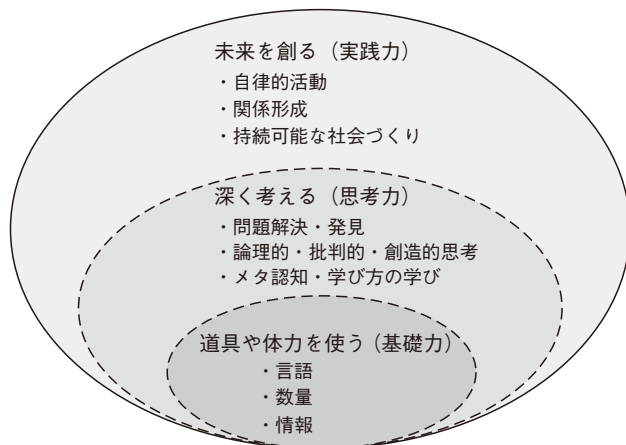


図1 国立教育政策研究所が提案した「21世紀を生き抜くための能力」

表1 「21世紀を生き抜くための能力」における3つの能力の整理

	求められる力（イメージ）	構成要素
未来を創る（実践力）	生活や社会、環境の中に問題を見だし、多様な他者との関係を築きながら答えを導き、自分の人生と社会を切り開いて、穏やかに豊かな未来を創る力	自律的活動 関係形成 持続可能な社会づくり
深く考える（思考力）	一人ひとりが自分の考えを持って他者と対話し、考えを比較吟味して統合し、よりよい答えや知識を創り出す力、更に次の問いを見つけ、学び続ける力	問題解決・発見 論理的・批判的・創造的思考 メタ認知・学び方の学び
道具や身体を使う（基礎力）	言語や数量、情報などの記号や自らの体を用いて、世界を理解し、表現する力	言語 数量 情報（デジタル、絵、形、音等）

したがって「臨床心理学」教育では、数量や情報を使用するスキルに関しても教育を提供することが可能である。

以上のように、「臨床心理学」教育は、教職志望の学生に対し、言語、数量、情報等を高いレベルで扱うことのできる「基礎力」を身に付けることが可能である。

## 2. 2 「深く考える（思考力）」の捉え方

流動化の著しい社会の中で生きていくためには、既存の知識や枠組みを考慮しながら、創造的に思考し、他者と協同していく「思考力」が求められる。「21世紀を生き抜くための能力」における「思考力」は、様々な思考を働かせながら、主体的・共同的に問題を解決し、更に新たな問いを見いだしていく力と定義され、「問題解決・発見」、「論理的・批判的・創造的思考」、「メタ認知・学び方の学び」の3要素で構成されている。人間は、自分の経験や知識を新たに学ぶ知識と結びつけ再構成して、自分なりの世界のモデルを創り変えていくことができる。しかし、知識を活用できる深い理解を可能にし、主体的な学びができるようになるために、理由や根拠まで問題を深く追及して納得する経験や、その思考プロセスを内省的に振り返り、学び方を学ぶといった経験を繰り返すことが必要となる。将来的に社会や生活の中で問いを立て、直面する課題を主体的に解決できる学び手になるためには、論理的・批判的・創造的に深く考え、自らの学びを省察する高次の思考力の養成が求められる。

ここでは、「基礎力」と同様に、「臨床心理学」教育の立場で、学生の「思考力」の養成にどのように寄与できるのかを検討する。「思考力」は「基礎力」を基盤としつつ、学校現場での生じる様々な課題を臨床心理学的観点から説明、解釈すること、それらを個別の支援計画等として立案し応用につなげること、多様な視点で課題を検討すること、他者への共感的対応や自己理解などのメタ認知能力を発揮することが挙げられる。これらの「思考力」を養成するために、英国の心理学学士課程教育で学生が身につける能力を明文化したFactors of Understanding and Connection to Clinical and Counseling Psychologyを用いて、「思考力」の養成指針と教育の到達目標を作成した(表2)<sup>2)</sup>。Factors of Understanding and Connection to Clinical and Counseling Psychologyは6つの要素で構成されている。このうち「問題解決・発見」では、基礎力と思考力を橋渡しするものとして「説明」、意味づけを行う力である「解釈」、さらに実践力へと橋渡しする「応用」が対応する。「論理的・批判的・創造的思考」では、複眼的視点から心理的事象を俯瞰する「多様な視点」が対応する。「メタ認知・学び方の学び」では、他者の立場や気持ちを相手の身になって考える力である「共感的対応」と、自身の限界を理解し、その限界の克服に努める「自己理解」が対応する。

教育実践として、「教育相談・カウンセリング論」の講義の中で学校不適応、発達障害、健康行動、心理アセスメント、精神疾患をテーマに、「思考力」の養成を行っている。すなわち、生活習慣や自然等様々な家庭環境や文化的背景、地域性などについて幅広く捉えることができ、障害や精神病理を偏見や誤解なく理解することができ、学校での様々な課題において心理アセスメントを用いて見立て、個別の支援計画を立て、実際に援助できることを目標としている。

## 2. 3 「未来を創る（実践力）」の捉え方

「実践力」は、「自律的活動力」、「人間関係形成力」、「社会参画力」から構成され、自分自身と社会の未来を切り開いていく力を意味する。人間が直面する今日的な課題の多くは、「基礎力」と「思考力」を「何のために使うか」が問われるものである。変化の激しい社会の中で起こり得る様々な問題に対して、主体的に進路や生き方を見出し、様々な人々と協力して解決できる力であり、多様性に富み、創造的で持続可能な社会づくりに、自らあるいは他者との協働で答えを出すことができる未来を創るための「実践力」が求められる。この「実践力」の養成は、体験的な問題解決学習において、体験を振り返り、学習した価値を内面化し、体験と志向を深く結びつけることで成立し、そして自分の生き方として身につけていくことが期待できる。

「臨床心理学」教育において、学生の「実践力」の養成にどのように寄与できるのかを述べる。「臨床心理学」教育では、児童生徒が直面する、対人関係の問題、不登校、いじめ、非行などの課題に対して、将来教員となる学生が児童生徒の背景と心情を理解し、臨床心理学的観点から支援を行うことができるという教員像を目指す。そのためには、基礎力や思考力を活かし、知識やスキルを別の場面や対象にも効果的に応用し、様々な課題に対して既存の知識を創造的に使って対処することが必要である。

以下、「実践力」の「自律的活動力」、「人間関係形成力」、「社会参画力」の3要素を養成するための、具体的な「臨床心理学」教育における取組みと評価基準の設定を行う。

表2 Factors of Understanding and Connection to Clinical and Counseling Psychologyにおける能力の6つの側面に基づいて作成した21世紀型能力の「思考力」を育成する教員養成（教育相談・カウンセリング領域）の到達目標

Factors of Understanding and Connection to Clinical and Counseling Psychologyにおける能力の側面	「21世紀型能力」の「思考力」の要素	「21世紀型能力」の「思考力」を育成する教員養成（教育相談・カウンセリング領域）での具体的到達目標
説明 （基礎力と思考力を架橋）  解釈  応用 （思考力と実践力を架橋）	問題解決・発見	I. 児童生徒、保護者に関連する各種課題に対する臨床心理学的見立てを立てることができる。
		II. 個別の支援計画を立案することができる。
		III. 教育現場における様々な課題に対する意味づけを明確かつ説得力のある解釈として表現できる。
		IV. 児童生徒、保護者に関してアセスメントを行い、他の教職員や外部機関との共通理解を行うことができる。
		V. 臨床心理学の理論を教育現場の様々な課題に適用し応用できる。
		VI. 児童生徒の発達課題や保護者の状況に応じた対応ができる。そのための心理教育的関わりの技能を習得し実践できる。
多様な視点	論理的・批判的・創造的思考	VII. 児童生徒の個別性に応じてさまざまな臨床心理学理論や技法を比較検討し、個々に合わせた対応法を考えることができる。
		VIII. 児童生徒や保護者、その家族のあり方の多様性を理解することができる。
共感的対応  自己理解	メタ認知・学び方の学び	IX. 児童生徒、保護者の感情を理解し相手の立場に立って課題について考えることができる。
		X. 障害や不適応、苦悩に対する自分自身の偏見や差別、専門的治療や支援に対する抵抗感や防衛的態度を理解することができる。
		XI. 自分自身の限界を自覚することができる。
		XII. 自分自身の先入観について自覚し、理解の妨げとなっている盲点に積極的に取り組むことができる。

### 3 「臨床心理学」教育における「実践力」の養成と評価基準

本稿では、『報告書5』の付表1「各学校段階で養成することが期待される実践力と共有価値」の中で提示されている「中学校」における下位カテゴリーを基準に、「21世紀を生き抜くための能力」の「実践力」を構成要素である「自律的活動能力」、「人間関係形成力」、「社会参画力」を「臨床心理学」教育においてどのように養成するか、その評価基準を表3に示す。

「自律的活動能力」とは、「主として自己自身に関わる能力と価値」であり、「自己を理解し行動を調整し、意思決定する力」、「グローバルな視点から自分の生き方や進路を考え、将来を設計する力」である。能力を「自分の行動を調整するとともに、自分の生き方を考え、キャリアを設計する力から構成される」とし、価値を「節制、向上心、主体性、自尊や不撓不屈を重点とする」と定義している。付表では、発達段階の観点から、この「自律的活動力」の下位カテゴリーとして、【生活習慣】、【健康・体力】、【計画実行力】、【自己理解・自己評価・自己受容・個性伸長】、【自律】、【自己決定】、【選択能力】を設定している。

「自律的活動力」に関し、まず【生活習慣】と【健康・体力】では、臨床心理学の観点から心身の健康の理解と対応力を深める。これが自律的活動を行うための基盤となる。心身の健康と体力が確保された中で、臨床心理学の様々な理論を通して、自身の個性を理解し、セルフ・アイデンティティの模索と達成へと志向する（【自己理解・自己評価・自己受容・個性伸長】）。そして、自己実現の確立とキャリア形成のための計画を立案、実行し（【計画実行力】）、精神的に自立し、自己の意思から責任をもって選択できる力を養うことを目指す（【自律】、【自己決定】、【選択能力】）。「自律的活動力」は、「思考力」の3要素、すなわち「問題解決・発見」、「論理的・批判的・創造的志向」、「メタ認知・学び方の学び」と密接に関連している。自身の問題を深く考え、メタ認知の観点から検討し、既存の知識を活用しながら創造的に解決していくことが、「自律的活動力」のさらなる促進に役立つと考えられる。

「人間関係形成力」とは、『報告書5』では「他者と効果的なコミュニケーションをとり、協力してよりよい人間関係づくりをする力」であり、具体的な対象として他者と集団を設定している。他者では「他者理解、表現力（能力）、礼儀、思いやり（価値）」、集団では「共同・協働、役割と責任（能力）、合意形成など」に関わる能力と価値としている。この「人間関係形成力」は、「社会参画力」にも関わるが、目標を共有し、協力して協議し合いながら、

表3 「21世紀を生き抜くための能力」の「実践力」の要素および下位項目と評価基準

実践力	能力・価値	「臨床心理学」における「実践力」の評価基準
自律的活動力	自己	<p><b>【能力】</b> 自己理解 自己調整 意志決定 主体性 キャリア設計</p> <p><b>【生活習慣】【健康・体力】</b> ・健康やストレス関連のさまざまな理論に基づき、児童生徒が健康的な生活習慣の必要性を理解し習得するとともに、心身の健康状態に応じた臨床心理学領域からの適切な対応が行える。</p> <p><b>【計画実行力】</b> ・自己の発達や自己コントロールなどに関する理論や方法論の理解に基づき、児童生徒が自己探求と自己実現に向けた目標の実現に向けて、計画立案、実行および評価を行い、必要に応じた計画の見直しができる。</p> <p>・児童生徒がさまざまな情報を元に、セルフ・アイデンティティ確立の1つとして、将来の方向性を創造的に考え探究することを促進できる。</p> <p><b>【自己理解・自己評価・自己受容・個性伸長】</b> ・自己の発達理論に基づき、児童生徒が自身の能力や個性、強さなどを理解するとともに、強さや苦手さを受容し成長を促す対応ができる。</p> <p><b>【自律】【自己決定】【選択能力】</b> ・児童生徒がさまざまな情報を元に、主体的に考え、意志と責任を認識できるようにかかわれる。</p> <p>・児童生徒のセルフ・アイデンティティの確立を促進できる。</p> <p>・児童生徒が選択の基準となる自身の価値観を確立し、多様な選択肢から意志と責任に基づき主体的な行動がとれるようにかかわることができる。</p>
	他者	<p><b>【能力・価値】</b> 他者理解 表現力 礼儀 思いやり</p> <p><b>【礼儀・マナー】【思いやり】【コミュニケーション・共感・他者理解・表現力】</b> ・対人関係やコミュニケーション理論の理解とコミュニケーション・スキルを高める。</p> <p>・自身の意見や思い、感情を表出するとともに、他者の思いや感情を相互に交流できる。</p> <p>・児童生徒の個別性に応じた対応ができる</p> <p>・時と場（TPO）に合わせた行動と逸脱行動および背景要因を理解し、学習者の発達段階に応じた心理教育実践が行える。</p>
人間関係形成力	集団	<p><b>【能力・価値】</b> 共同・協働 役割と責任 合意形成</p> <p>・学校内外のさまざまなチームに関する理論を理解し、チーム・メンバーとして主体的に活動に参画する。</p> <p>・課題への協働した活動を通し、自他ともの役割を認識し責任の共有を行える。</p>
	社会	<p><b>【能力・価値】</b> 規範意識 社会連帯 文化尊重 公德心 権利・義務 勤労・就業力・ 起業家精神 正義・公正 寛容</p> <p><b>【規範意識】【権利・義務】</b> ・さまざまな場や関係におけるルールやマナーと道徳観の発達理論の理解に基づき、自他の権利と義務を理解し、よりよい社会づくりや社会参加が行える。</p> <p><b>【勤労・創造】</b> ・自己理解に基づき、社会人としての協働の意義を理解し、働くことによる社会貢献と自己実現をしながら新しい社会づくりに貢献できるような心理教育が行える。</p> <p>・平等と公平および差別や偏見が生じる社会文化的影響を理解し、人権の尊重と共同した組織および地域、社会の実現に取り組める。</p> <p>・地域社会のさまざまな歴史や伝統文化、活動に参加するとともに、多文化共生マインドと受容行動を高める。</p>
社会参画力	命	<p><b>【能力・価値】</b> 防災・安全 生命尊厳 自他の生命の 尊重</p> <p><b>【尊厳】</b> ・成長や老いること、障害や死生学など「生きること」に関する理解を深め、生命尊厳の在り方に関する自身の価値観を確立する。</p> <p><b>【防災・安全】</b> ・さまざまな危機的状態とそれぞれにおける身体的・心理的・社会的反応を理解し、対応や支援法を習得し実践できる。</p> <p>・安心感のある社会のためのさまざまな活動を理解し、多面的な健康状態の維持・向上への心理教育ができる。</p>

様々な人々や集団に積極的に関わって関係作りをする力のことである。付表では下位カテゴリーに、【礼儀・マナー】、【思いやり】、【コミュニケーション・共感・他者理解・表現力】を設定している。

「人間関係形成力」について、他者に対しては、臨床心理面接やカウンセリングの理論と実践を通して、他者尊重の精神や共感的理解を育み、他者との相互作用にコミットする能力と価値観の養成を目的とする（【礼儀・マナー】、【思いやり】、【コミュニケーション・共感・他者理解・表現力】）。集団に対しては、学校内外の専門家との協働を通して児童生徒の問題を円滑に解決する能力と、チームで取り組む価値観の形成を目指す。「人間関係形成力」は、「自律的活動力」と同様に「思考力」がその基盤として存在する。多様な視点を持ち、自身の先入観も理解したうえで他

者を理解することが、他者や集団との共感的で円滑な相互作用により影響を与えられられる。

「社会参画力」とは、「これからの社会において、グローバルあるいはローカルな場面で起こりうる様々な倫理的問題に積極的に関わり、市民的責任を自覚して行動する力」と定義される。社会、命、自然から構成され、「社会」では「規範意識、社会連帯、文化尊重、公德心、権利・義務、勤労・就業力・起業家精神、正義・公正、寛容など」の能力や価値、「命」では「防災・安全（能力）、生命尊厳（価値）、自他の生命の尊重」、「自然」では「感動や畏敬など体験を通して育まれる価値を基盤として身近な自然から地球環境や生態系までの保護・保全」に関わる能力や価値が含まれる。付表では下位カテゴリーに、【規範意識】、【権利・義務】、【勤労・創造】、【尊厳】、【防災・安全】を設定している。

「社会参画力」について、カウンセリングマインドをもつことで、他者を尊重し、自他の権利と義務を理解し（【規範意識】、【権利・義務】）、様々な文化的背景をもつ他者や地域との協働し（【勤労・創造】）、よりよい社会づくりへと貢献できるように志向させる。そして障害への知識を身につけ、発達の観点から人間の一生を理解する視点を持ち、生命尊厳の価値観を身につける（【尊厳】、【防災・安全】）。「社会参画力」は、「自律的活動力」と「人間関係形成力」によって、より高度なものになると考えられる。なお自然の領域は、「臨床心理学」教育では扱うことが難しいと判断し、評価基準に含めなかった。

「臨床心理学」教育は、臨床心理学そのものが学校教育課程の正式科目ではない分、普段の学級経営や児童生徒・保護者との関わり、学校関係者との連携・協働を通して、間接的に児童生徒の「実践力」の養成につながるものが期待される。そのために学生は、「実践力」を身につけるとともに、それを実際の教育現場へどのように活用していくのかを念頭に置いて学習する必要がある。ここに、「実践力」の養成の難しさがある。そのため「実践力」を身につける教育の工夫として、演習形式の重視と省察する機会の確保を積極的に採用している。座学で学んだ知識を価値観へと内在化するためには、繰り返しのリハーサルが大きな意味をもつ。臨床心理学は基礎と臨床との橋渡しを重視する学問であることから、「実践力」養成のための工夫が多く蓄積されてきた。例えば「カウンセリング基礎演習」では、カウンセリングスキルを習得するためのマイクロカウンセリング技法のプログラムを用いて、スキルだけでなく、人間観の養成も図っている。また省察する機会の確保は、学級経営や児童生徒との関わりにおける「実践力」を高めるための重要な授業過程と位置づけ、例えば「教職実践演習」と「実践セミナー」では、発表者の発表内容をグループ内で綿密に吟味しディスカッションする機会を十分に設けている。特に、教員の心理教育や実践および関わり方が、児童生徒の成長と発達に関してどのように貢献できるのかを重視している。これら実用性を重視した教育によって、「実践力」の養成は効果的なものになり、「実践力」を身につけた学生は、将来の教育現場に対してこれを活用し、そして児童生徒の「実践力」の養成につながるものと期待される。

以下本稿では、学部における「臨床心理学」教育として、臨床心理学の知識と能力の習得に重点を置く「臨床心理学」と「カウンセリング基礎演習」、臨床心理学の教育現場への活用を重視する「教職実践演習」と「実践セミナー」を取り上げ、「臨床心理学」教育における「実践力」の評価基準を基にした、それぞれの科目における養成方針と評価基準を説明する。

#### 4 「臨床心理学」と「カウンセリング基礎実習」における「実践力」の養成と評価基準

学部2年生を対象とする「臨床心理学」と「カウンセリング基礎演習」は、臨床心理学コースの必修講義である。「臨床心理学」は様々な理論や精神障害を説明し、臨床心理学の基礎となる知識の習得を目指し、「カウンセリング基礎演習」は演習形式でカウンセリングスキルとカウンセリングマインドを習得することを目的とし、この2つの授業から、臨床心理学の基礎と応用を学習する。

「臨床心理学」は、臨床心理学の知識を経験的に習得できるように、座学だけでなく演習も多く取り入れた講義である。臨床心理学の中核的要素である心理査定と心理面接に重点を置いている。心理査定では面接法と観察法、検査法の説明を行い、実際に演習を行って理解を深める。心理面接では、精神分析、認知行動療法、クライエント中心療法など様々な理論を説明し、実際事例を通して提示することで実践的な知識になるよう努めている。また臨床実践で不可欠な、不安症、うつ病、統合失調症などの精神疾患および様々な「異常」とされる症状を説明し、教育現場にも適用できる知識の習得を目指している。また経験的に習得できるように、認知行動療法や心理検査などを用いたワークを行っている。

「カウンセリング基礎演習」は、カウンセリングの価値観と能力の習得を目指した、演習を重視した講義である。内容は、知識の提示からその演習（ロールプレイ）、そしてそれについてのグループディスカッションによる省察という一連の流れが基本となる。またこの演習を受けるにあたって、他者と経験に開かれた姿勢をもち他者に興味関

心をもつこと、ロールプレイでは話しすぎないように、また守秘義務を守ることを伝える。これは実際の実践においても重要な倫理的配慮であり、この説明を通して倫理を学ぶことが期待される。この演習では、カウンセリングスキルの基礎となる部分からスモールステップで一つずつ習得していくマイクロカウンセリングのプログラムを中核にしている。そして、実際に教育現場で応用できるように、教育現場に関連する課題でロールプレイを行い、グループディスカッションすることで、臨床心理学的な実践力を高めようと考えている。

主に「臨床心理学」は臨床心理学の基礎を、「カウンセリング基礎演習」は臨床心理学の実践を念頭に置いている。両科目による基礎と実践の橋渡しにより、学生の臨床心理学的な価値観の内在化と実際的な能力の習得が期待され、「実践力」の養成へとつながると考えられる。またこれらの講義と演習は、「21世紀を生き抜くための能力」の「思考力」の養成にも大きく関わっている。すなわち、ワーク、ロールプレイ、グループディスカッションを積極的に取り入れることで、座学で学んだ知識を実践へと昇華し、その授業の中で「思考力」と「実践力」の成長が相互的に生じる。

この項では、表3の「臨床心理学」教育における「実践力」の養成の評価基準に照らし合わせ、「臨床心理学」と「カウンセリング基礎演習」における「実践力」の評価基準を表4に示すとともに、両科目ごとに評価基準の到達を目指すための取組みを説明する。

(近藤 孝司)

表4 「臨床心理学」教育における「実践力」の評価基準（「臨床心理学」と「カウンセリング基礎演習」）

実践力	能力・価値	「臨床心理学」における「実践力」の評価基準	「臨床心理学」と「カウンセリング基礎演習」における評価基準	
自律的活動力	自己	<b>【能力】</b> 自己理解、自己調整、意志決定、主体性、キャリア設計  <b>【価値】</b> 節制、自尊・自信、個性伸長、不撓不屈、向上心	<b>【生活習慣】</b> <b>【健康・体力】</b> <b>【計画実行力】</b> <b>【自己理解・自己評価・自己受容・個性伸長】</b> <b>【自律】</b> <b>【自己決定】</b> <b>【選択能力】</b>	① 児童生徒の不適応を臨床心理学・精神医学の観点から理解し、援助の見立てを立てることができる。 （臨床心理学・カウンセリング基礎演習） ② 様々な理論を用いて児童生徒のパーソナリティや価値観、人間関係などの個性を理解することができる。 （臨床心理学・カウンセリング基礎演習） ③ 児童生徒の適応的な行動を増やすことを目的とした環境づくりを計画し、実行できるようになる。 （臨床心理学） ④ 児童生徒が内省し、自己理解を深めることが可能な関わり方ができる。 （臨床心理学・カウンセリング基礎演習） ⑤ 開発的カウンセリングの観点から、児童生徒の主体性を促し、自己実現・キャリア設計へと方向づけられる。 （臨床心理学・カウンセリング基礎演習）
	他者	<b>【能力・価値】</b> 他者理解、表現力、礼儀、思いやり	<b>【礼儀・マナー】</b> <b>【思いやり】</b> <b>【コミュニケーション・共感・他者理解・表現力】</b>	⑥ 学生がカウンセリングマインドとカウンセリングスキルを身に付け、他者尊重の模範となっている。 （カウンセリング基礎演習）
人間関係形成力	集団	<b>【能力・価値】</b> 共同・協働、役割と責任、合意形成	⑦ 児童生徒の抱える問題を、家庭、学級、学校、地域からアセスメントし、他職種との連携を通じて対応ができる。 （臨床心理学・カウンセリング基礎演習）	
	社会	<b>【能力・価値】</b> 規範意識、社会連帯、文化尊重公徳心、権利・義務、勤労・就業力・起業家精神、正義・公正、寛容	<b>【規範意識】</b> <b>【権利・義務】</b> <b>【勤労・創造】</b>	⑧ 児童生徒が社会の中で自己主張と他者尊重の姿勢を発揮するために、模範として学生がカウンセリングマインドとカウンセリングスキルを身に付けている。 （カウンセリング基礎演習） ⑨ 時代の変化から臨床心理学の歴史を理解し、時代に合った人間観をもっている。 （臨床心理学・カウンセリング基礎演習）
社会参画力	命	<b>【能力・価値】</b> 防災・安全、生命尊厳、自他の生命の尊重	<b>【尊厳】</b> <b>【防災・安全】</b>	⑩ 精神疾患に関する正確な知識を養い、障害への偏見や差別を知ることで、学生が他者を尊重し公平に関わる態度を児童生徒に示すことができる。 （臨床心理学）

#### 4. 1 「臨床心理学」と「実践力」

「臨床心理学」の講義では、臨床心理学における様々な理論と実践に関する知識を養うことを目的としている。悩みや問題を抱える他者の援助方法の理解を通して、学生が教育分野においてその知識を生かせるようになることを目指す。講義の前半では、臨床心理学の歴史、臨床心理査定法、精神病理学に関する知識などを扱う。後半では「臨床心理面接の理論と実際」として、クライアント中心療法、応用行動分析、認知行動療法などの援助法に関する背景理論と実践法を扱う。講義では体験的に理解することも重視するため、様々な理論や援助法を説明した後で、学生同士でディスカッションする時間を取り入れたり、援助法に含まれるエクササイズを実際に行ってもらおう。以下に「自律的活動力」「人間関係形成力」「社会参画力」それぞれに関して、表4の評価基準と、学生の実践力を高めるために有効と考えられる講義内容をまとめる。

「自律的活動力」の評価基準には、①児童生徒の不応答を臨床心理学・精神医学の観点から理解し、援助の見立てを立てることができる、②様々な理論を用いて児童生徒のパーソナリティや価値観、人間関係などの個性を理解することができる、③児童生徒の適応的な行動を増やすことを目的とした環境づくりを計画し、実行できるようになる、④児童生徒が内省し、自己理解を深めることが可能な関わり方ができる、⑤開発的カウンセリングの観点から、児童生徒の主体性を促し、自己実現・キャリア設計へと方向づけられる、を設定した。講義では、これらを達成するために、児童期から青年期にかけてみられる心の問題に関する知識を伝え、パーソナリティの理論や査定の方法、行動理論に基づいた児童生徒の行動の理解の仕方などを教える。また、実践力を高めるための方法として、学生に自身の行動を分析してもらい、行動変容を狙いとした環境調整の計画を立てるエクササイズを行わせることが有用だろう。セルフ・コントロールを行うために自分自身の環境を調整する力は、他者の援助を実践するための基盤である。自分自身の行動を理解し、行動変容の計画を立てて実践し、結果に基づいて適宜修正するという一連のエクササイズを行うことで、教育現場において児童生徒の適応的な行動を増やすための環境づくりを行える力を高めることができると考えられる。

次に「人間関係形成力」については、特に集団において他者と協働しながら主体的に問題に取り組む力を高めることができると考えられる。「臨床心理学」における具体的な評価基準は、⑦児童生徒の抱える問題を、家庭、学級、学校、地域からアセスメントし、他職種との連携を通じて対応ができる、と設定している。そのための講義内容としては、教育現場で子どもの支援を行う際に、心理職、教員、保護者等の間でしばしば生じる問題を紹介することが挙げられる。学生には、なぜそのような問題が生じるのか、それぞれの立場でどのような点に重きが置かれているのか、具体的にどのような解決策があるのかなどを、ディスカッションを通して考えてもらう。このような取り組みを体験することで、問題を客観的に捉えられる力を高め、自己と他者の立場や考え方の違いを自覚することで、学生が協調的に教育活動や相談活動を実践できるようになると考えられる。

最後に、「社会参画力」に関しては、⑧時代の変化から臨床心理学の歴史を理解し、時代に合った人間観をもっている、⑨精神疾患に関する正確な知識を養い、障害への偏見や差別を知ることで、学生が他者を尊重し公平に関わる態度を児童生徒に示すことができる、⑩精神疾患に関する正確な知識を養い、障害への偏見や差別を知ることで、学生が他者を尊重し公平に関わる態度を児童生徒に示すことができる、の3つの評価基準を設定した。講義では、精神疾患がこれまでどのように捉えられてきたかに関する歴史を扱う。また、疫学調査の結果に基づいた、精神疾患に関する正確な情報を伝え、精神疾患を有する人がどのような困難感を抱えているのかなど、映像教材なども利用しながら学生に知ってもらおう。それにより、例えば発達障害によって不応答状態にある子どもに教育者として関わる上で、発達特性を踏まえた上で教育や支援の計画を立てられるようになるだろう。あるいは、うつ病や不安症に関する正確な知識を得ることで、そのような問題で困難感を抱えている児童生徒に寄り添ったり、適切な関わりを実践できるようになると考えられる。

(宮崎 球一)

#### 4. 2 「カウンセリング基礎演習」と「実践力」

カウンセリングスキルとカウンセリングマインドの習得を目指す「カウンセリング基礎演習」は、教育現場に活用可能な「実践力」を養う演習であり、そのためにマイクロカウンセリングに主軸を置いている。まずクライアント中心療法の人間観を解説し、基本的関わり技法、はげまし、質問技法、言い換え、感情の反映、要約、フィードバック、自己開示を中心にマイクロカウンセリング・プログラムを実施している。これにより、カウンセリングの人間観に基づくカウンセリングスキルが養成されることが期待される。今日の教育現場では、不登校やいじめ、非行、人間関係のトラブルなど、様々な不応答や心理的問題に対して教育相談の観点からの対応と援助が必要となるケースが増えている。従来の教育的な指導が困難である場合、別の観点、特に臨床心理学の観点からのアプローチが有効となる



場合も多々ある。教員がカウンセリングスキルを修得していることで、これらの事例への円滑で効果的な援助が可能になると考えられる。以下、表4の「カウンセリング基礎演習」における「実践力」の評価基準の設定の仕方について説明していく。

「自律的活動力」に対応する評価基準に、①児童生徒の不適応状態を臨床心理学・精神医学の観点から理解し、援助の見立てを立てることができる、②様々な理論を用いて児童生徒のパーソナリティや価値観、人間関係などの個性を理解することができる、④児童生徒が内省し、自己理解を深めることが可能な関わり方ができる、⑤開発的カウンセリングの観点から、児童生徒の主体性を促し、自己実現・キャリア設計へと方向づけられる、を設定した。これらの評価基準を満たすために、臨床心理学の知識と理論を学び、それを自分自身に適用して省察すること、また人間が自己実現へと志向することの重要性を学ぶ。そして、自身の得た経験と知識を教育現場で活用することが期待される。

「人間関係形成力」に対応する評価基準に、⑥学生がカウンセリングマインドとカウンセリングスキルを身に付け、他者尊重の模範となっている、⑦児童生徒の抱える問題を、家庭、学級、学校、地域からアセスメントし、他職種との連携を通じて対応ができる、を設定した。「人間関係形成力」の評価基準の到達は、カウンセリングスキルとマインドを覚えるのではなく、スキルが日常生活に身近なものであることに気づき、日常のスキルを専門的なレベルへと発達させることをイメージし、実際の児童生徒の援助に役立てるようなロールプレイを行う。そこでは省察する機会として、グループディスカッションを設ける。学生がカウンセリングスキルを身につけることで、教育現場における児童生徒との関わりから、児童生徒のコミュニケーション・スキルの向上に活用されることが期待される。

「社会参画力」に対応する評価基準に、⑧児童生徒が社会の中で自己主張と他者尊重の姿勢を発揮するために、模範として学生がカウンセリングマインドとカウンセリングスキルを身に付けている、⑨時代の変化から臨床心理学の歴史を理解し、時代に合った人間観をもっている、を設定した。これを達成するために、カウンセリングが必要になった歴史的背景を解説し、過去から今日に至る心理的援助の歴史の連続性の理解を深める。また演習の過程で、カウンセリングマインドにおける他者尊重の精神を学級・地域・社会へと還元できるように、学級や社会問題を取り上げてディスカッションを行う。

(近藤 孝司)

## 5 「教職実習演習」と「実践セミナー」における「実践力」の養成と評価基準

実践セミナー「臨床心理学」は、学部3年生を対象とした実践科目であり、初等教育実習での経験をもとに教育実践場面の事例検討を行う形式の講義である。臨床心理学コースでの「実践セミナー」では、事例報告のテーマとして、特に、学校における長期欠席やいじめ、家族関係での困難さや神経発達症をもつなど、児童生徒の様々な心理的困難さを取り上げて、討論を行っている。また、討論の内容は、スクール・カウンセラーを含む校内の教育相談体制に関する事柄だけでなく、医療機関、児童相談所、家庭裁判所などの教育機関以外の組織との連携などに関する事柄など多岐に渡る。実践セミナー「臨床心理学」では、事例報告とその検討を通して、教育実践において必要となる、子どもへの理解や関わり、支援、連携についての学びを深めることが期待される。

次に、「教職実践演習」とは、“教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付けられる”科目である(平成18年度中教審答申より抜粋)。平成18年度中教審答申<sup>3)</sup>によれば、「教職実践演習」の演習内容には、1) 使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、2) 社会性や対人関係能力に関する事項、3) 幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、4) 教科・保育内容等の指導力に関する4つの事項が含まれることが求められている。これを踏まえ、上越教育大学臨床心理学コースでは、児童生徒の心理教育に焦点を置き、保健や道徳、総合学習などの学校授業における心理教育の実践を想定した授業を行うことで、「教職実践演習」の実質化に取り組んでいる。学生は、教育実習を行った実習校の様子を踏まえ、ストレス・マネジメント、アンダー・マネジメント、社会的スキル訓練、感受性訓練など、その実習校に必要な心理教育を考えて指導案の作成し、模擬授業を行い、その討論と振り返りを行うことが求められる。「教職実践演習」では、これらの授業を通して、実践的指導力の養成が期待される。

両科目は、教員と学生が授業科目間の連携を意識して取り組むことで、学習と実践を繋ぎ合わせるための重要科目となりうる(e.g., 南埜・岸田・別惣・山中・石野・藤原, 2015<sup>4)</sup>)。「実践セミナー」と「教職実践演習」を通して、学習と実践を繋ぐことができれば、実践的理解や指導力に優れた教員の養成が可能であると考えられる。そこで、本

項では、表3に示した臨床心理学領域における「実践力」の評価基準を踏まえ、両科目に共通する評価基準を検討した(表5)。詳しくは、5.1, 5.2で解説する。

(田中 圭介)

### 5. 1 「実践セミナー」と「実践力」

実践セミナー「臨床心理学」は、学部3年生を対象として、教育実践場面で生じる様々な児童生徒の問題について、臨床心理学的観点から事例の分析および討論を行うものである。本講義には、並行して開講されている大学院臨床心理学コース対象の実践場面分析演習「臨床心理」を受講している大学院生とともに合同で講義に参加する。

表5 「臨床心理学」教育における「実践力」の評価基準（「教職実習演習」と「実践セミナー」）

実践力	能力・価値	「臨床心理学」における「実践力」の評価基準	「教職実習演習」と「実践セミナー」における評価基準
自律的 活動力 自己	【能力】 自己理解, 自己調整, 意志決定, 主体性, キャリア設計	【生活習慣】 【健康・体力】 【計画実行力】 【自己理解・自己評価・自己受容・個性伸長】 【自律】 【自己決定】 【選択能力】	<ul style="list-style-type: none"> <li>事例検討を通して、児童生徒のメンタルヘルスを日常生活の実態から理解しようとする。 (実践セミナー)</li> <li>模擬授業を通して、児童生徒の主体性を促す工夫を、心理学的観点から考えることができる。 (教職実践演習)</li> <li>学生自らが児童生徒の個性を尊重することができる。 (実践セミナー, 教職実践演習)</li> <li>事例検討を通して、児童生徒の能力や個性, 強さなどを理解することに努め, 自尊心や成長を促すかわり方について議論することができる。 (実践セミナー)</li> <li>模擬授業を通して、アイデンティティや価値観に働きかける心理教育を実践することができる。 (教職実践演習)</li> <li>事例検討を通して、課題を抱えた児童生徒の今後の発達や望ましい方向性について考えることができる。 (実践セミナー)</li> </ul>
	【価値】 節制, 自尊・自信, 個性伸長, 不撓不屈, 向上心		
人間関係 形成力 他者	【能力・価値】 他者理解, 表現力, 礼儀, 思いやり	【礼儀・マナー】 【思いやり】 【コミュニケーション・共感・他者理解・表現力】	<ul style="list-style-type: none"> <li>事例検討を通して、児童生徒の逸脱行動とその背景要因について考えることができる。 (実践セミナー)</li> <li>学生自らが児童生徒の模範となるような礼儀や思いやり, コミュニケーションを取ることができる。 (実践セミナー, 教職実践演習)</li> <li>模擬授業を通して、児童生徒に適応的行動を指導したり, 児童生徒のコミュニケーション・スキルや思いやりに働きかけることができる。 (教職実践演習)</li> </ul>
	【能力・価値】 共同・協働, 役割と責任, 合意形成		
社会 参画力 社会	【能力・価値】 規範意識, 社会連帯, 文化尊重 公德心, 権利・義務, 勤労・就業力・起業家精神, 正義・公正, 寛容	【規範意識】 【権利・義務】 【勤労・創造】	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童生徒の模範となる規範意識を持つことができる。 (実践セミナー, 教職実践演習)</li> <li>模擬授業を通して、児童生徒に対してルールやマナーを指導することができる。 (教職実践演習)</li> <li>学生自らが児童生徒の模範となることを自覚し, 教育活動に取り組むことができる。 (実践セミナー, 教職実践演習)</li> </ul>
	【能力・価値】 防災・安全, 生命尊厳, 自他の生命の尊重		
命	【能力・価値】 防災・安全, 生命尊厳, 自他の生命の尊重	【尊厳】 【防災・安全】	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童生徒の社会的アイデンティティや人権理解に働きかけることができる。 (実践セミナー, 教職実践演習)</li> </ul>

平成28年度に取り上げられたテーマとしては、不登校、いじめ、生徒指導上の問題行動、発達障害に関わる集団不適応などがあった。演習では、まず直近に行われた初等教育実習での経験をもとに、各自が20分程度のプレゼンテーションを行った。この内容としては、実際に参加や担当した学級における上記のような問題のある児童やその集団の状態を報告し、さらにその児童や学級での指導や支援の経過について報告した。また、臨床心理学コースに在籍している現職教員の大学院生からの報告も折り込み、それらの発表や報告を踏まえて、8から10人程度の小グループになり討論を行った。この討論では、報告された事例や学級での状態について、問題の背景、対象児童の臨床心理学的問題、学級集団における指導や支援の課題、指導や支援の経過、今後の対策等について話し合われた。最後に、グループ毎に討論の概要が報告され、質疑と応答を経て、演習担当教員からの講評が行われた。

これらの内容を踏まえ、実践セミナー「臨床心理学」における「21世紀を生き抜くための能力」の「実践力」に関する評価基準を検討した。「自律的活動力」の評価項目として、『事例検討を通して、児童生徒のメンタルヘルスを日常生活の実態から理解しようとする』、『学生自らが児童生徒の個性を尊重することができる』、『事例検討を通して、児童生徒の能力や個性、強さなどを理解することに努め、自尊心や成長を促すかわり方について議論することができる』、『事例検討を通して、課題を抱えた児童生徒の今後の発達や望ましい方向性について考えることができる』の4点が挙げられた。「人間関係形成力」の評価項目として、『事例検討を通して、児童生徒の逸脱行動とその背景要因について考えることができる』、『学生自らが児童生徒の模範となるような礼儀や思いやり、コミュニケーションを取ることができる』、『学生自らが児童生徒や家族、教職員、専門家と連携を取ることの重要性を理解することができる』、『事例検討を通して、児童生徒の行動についても、集団のダイナミクスから理解することができる』の4点が挙げられた。また「社会参画力」の評価項目として、『児童生徒の模範となる規範意識を持つことができる』、『学生自らが児童生徒の模範となることを自覚し、教育活動に取り組むことができる』、『児童生徒の社会的アイデンティティや人権理解に働きかけることができる』の3点が挙げられた。

以上のように、本演習では、学生自らが体験した初等教育実習に基づいて、事例を報告することを中心に構成されている。そして、その内容についてさらに、合同で演習に参加している大学院臨床心理学コースの学生や現職教員との討論を経て、理論上ばかりではなく、実践的な観点からの児童生徒の理解を進めていくように構成されている。このような授業を通して学生は、教育現場で生じている児童生徒の問題や課題について、臨床心理学的な観点からの問題意識をもち、また教育者としての実践力を醸成することが求められるだろう。そのために本評価基準を設定した。

(加藤 哲文)

## 5. 2 「教職実践演習」と「実践力」

「教職実践演習」(臨床心理学)では、まず、受講生に対して、各自の学部3年次教育実習担当学級を想起して授業のテーマを決定し、25-30分程度の指導案を作成することを求めた。その後、各回3名ずつ、作成した指導案を基に、教員とその他の受講生を対象とした模擬授業を実施してもらい、討論と振り返りを行った。特に、平成28年度の「教職実践演習」(臨床心理学)では、臨床心理学的知見を活用した心理教育を行うことをテーマとした。例として、平成28年度には、『あたたかい言葉かけ』、『相手の気持ちを考えて行動する』、『話す力、聞く力』、『上手な誘い方』、『自分の気持ちをはっきりと伝える』、『気持ちを表す』、『お互いの違いを知る』などのテーマが取り上げられた。

これらの授業内容を踏まえ、「教職実践演習」(臨床心理学)における「21世紀を生き抜くための能力」の「実践力」に関する評価基準を検討した。「自律的活動力」の評価項目として、『模擬授業を通して、児童生徒の主体性を促す工夫を、心理学的観点から考えることができる』、『学生自らが児童生徒の個性を尊重することができる』、『模擬授業を通して、アイデンティティや価値観に働きかける心理教育を実践することができる』の3点が挙げられた。「人間関係形成力」の評価項目として、『学生自らが児童生徒の模範となるような礼儀や思いやり、コミュニケーションを取ることができる』、『模擬授業を通して、児童生徒に適応的行動を指導したり、児童生徒のコミュニケーションスキルや思いやりに働きかけることができる』、『学生自らが児童生徒や家族、教職員、専門家と連携を取ることの重要性を理解することができる』の3点が挙げられた。「社会参画力」の評価項目として、『児童生徒の模範となる規範意識を持つことができる』、『模擬授業を通して、児童生徒に対してルールやマナーを指導することができる』、『学生自らが児童生徒の模範となることを自覚し、教育活動に取り組むことができる』、『児童生徒の社会的アイデンティティや人権理解に働きかけることができる』の4点が挙げられた。

岡林(1997)<sup>5)</sup>によれば、心理教育とは、児童生徒に、傾聴スキル、自己主張スキル、対人関係スキルなどの心理的なスキルを享受することに焦点を当てた教育フレームからの広い意味でのカウンセリングのアプローチである。不登校やいじめ、思いやりの欠如といった今日の学校現場で起きている種々の課題や問題への対処と予防のために、現代

の学校現場には児童生徒の健全な心の成長を促す機能や実践が求められている。心理教育はその根幹をなすものといえる。これらのことから、心理教育は、児童生徒の自立（「自律的活動力」）、協働（「人間関係形成力」）、創造（「社会参画力」）の成長に関して、臨床心理学的観点から具体的に取り組むためのアプローチであるといえよう。また、心理教育の効果を上げるためには、教員がスキルの手本（モデル）を示すことが重要であることが指摘されている（e.g., 佐藤・相川, 2005<sup>9)</sup>。「21世紀を生き抜く能力」を児童生徒に対して育成することを考える際には、指導者側に、モデルとしての「実践力」が備わっていることが求められるだろう。そのため、本評価基準は、教員を目指す学生自らが「実践力」を備え、それを児童生徒へと伝達していく姿勢を有することを評価の観点として取り入れたものとなっている。

(田中 圭介)

## 6 おわりに

以上のように、「臨床心理学」教育における「21世紀を生き抜くための能力」の「実践力」を養成するために、「臨床心理学」、「カウンセリング基礎演習」、「実践セミナー」、「教職実践演習」における評価基準を設定した。これらの教育の実践は、学生と児童生徒の「実践力」の養成に大きく資するものと考えられる。

本コースの「臨床心理学」教育の目的は、教員が臨床心理学の知識と技能を教育現場に活用させ、様々な心理的課題への対応力を養うと同時に、児童生徒の成長を促すことである。そのためにマイクロカウンセリング、グループディスカッション、心理教育等の演習を重視しており、これによって様々な背景をもつ児童生徒に対し、周囲の集団と社会を考慮しながら、個性に応じた理解と対応が可能になる。また本人の課題解決能力や他者を尊重する精神、コミュニケーション・スキルの発達にもつながる。

(近藤 孝司)

## 引用文献

- 1) 高山 巖 (1999). 臨床心理学 中島 義明・安藤 清志・子安 増生・坂野 雄二・繁栞 算男・立花 政夫・箱田 裕司 (編) 心理学辞典 p.892. 有斐閣
- 2) 加藤 哲文・五十嵐 透子・近藤 孝司・田中 圭介・宮下 敏恵・山本 隆一郎 (2017). 「教育相談・カウンセリング」教育における「21世紀を生き抜くための能力」の「思考力」の捉え方 上越教育大学研究紀要, 36(2), 413-465
- 3) 中央教育審議会 (2006). 今後の教員養成・免許制度の在り方について (答申) 平成18年7月
- 4) 南埜 猛・岸田 恵津・別惣 淳二・山中 一英・石野 秀明・藤原 忠雄 (2015). 教職実践演習「模擬授業」の授業実践から考えるカリキュラム改善の提案 兵庫教育大学研究紀要, 47, 49-59.
- 5) 岡林 春雄 (1997). 心理教育 金子書房
- 6) 佐藤 正二・相川 充 (2005). 実践! ソーシャルスキル教育 小学校編-対人関係能力を育てる授業の最前線- 図書文化社

# How improve and expand the education of “theory and methods of clinical psychology” in teacher training education as the 21st century competencies for sustainable development

Tetsubumi KATO\* · Toko IGARASHI\* · Takashi KONDO\* · Keisuke TANAKA\* ·  
Kyūichi MIYAZAKI\* · Toshie MIYASHITA\*

## ABSTRACT

Teachers in the 21st century have been facing to fully respond the diverse abilities and qualities of students as well as their psychological difficulties and issues. Simultaneously, teacher training education is required to foster teacher training students' practice abilities and skills. The purpose of this article is to report how to educate “clinical psychology” at the educational institute in order for students to be able to effectively interact, support, and solve their elementary and middle school students' difficulties and issues psychologically. After setting evaluation criteria based on the appendix of “Report 5”, the content of four lectures, practicum, or seminar was discussed: “Introduction to Clinical Psychology” “Counseling Basics Practicum” “Practical Seminar about the Educational Practice” and “Practical Seminar on Clinical Psychology”.

**key words:** 21st century competencies, practical capabilities, clinical psychology, teacher training education